『大正後期の宝飾文化産業史』―その①

P1～13

※参考文献は各回の最後に記す。
※所蔵先、出典の記載のないものは日本宝飾クラフト学院蔵。

大正後期
大正九～十五年（１９２０～２６）
恐慌と大震災が直撃、景気後退期のジュエリーと宝石

はじめに

『大正前期の宝飾文化産業史』では、日本のジュエリーと宝石がピークを迎えた時代について見てきた。

ここからは大正後期の宝飾装身具の歴史を見ていく。

この時代は恐慌あり、関東大震災ありと、予期せぬ事が起きた景気後退期であり不況の時代である。この大変な時代を先人たちはどう生き抜いてきたか。現代の私達に参考になることもあると思う。

大正後期の宝飾装身具には新しい動きもあるが、指輪のデザインなどは基本的に大正前期の延長線上にある。

だが大正前期に使われ始めた結婚指輪が広まり、中流以上の社会で広く用いられるようになったのもこの時代である。また、髪飾り―特に束髪用―にはアール・ヌーヴォーの影響を受けたものなど、前期には見られないものも登場した。

ここでは大正後期の出来事と装身具について、前期との重複を避けて見ていく。

2-1 この時代と宝飾装身具の概要

戦後恐慌

日本に好景気をもたらした第一次世界大戦は大正七年（１９１８）に終わる。

いつの時代でも同じであるが、好況のあとにはその反動としての不況が来る。大正九年（１９２０）からは、好況から一転して、戦後恐慌による不況の時代に入った。

大正十二年（１９２３）には関東大震災も起き、業界、特に製造業者は大きな打撃を受けた。

この時代にもダイヤモンド等の高価な宝石も売れていたが大正前期ほどの勢いはなくなり、主流は養殖真珠や手頃な価格の当時合成宝石と呼ばれていた合成石になる。とはいえ、大正前期には見られなかった新しい宝石も何種類か市場に現われ、流行に敏感な女性たちを喜ばせた。

地金は、プラチナが普及したが、プラチナの代用品としてホワイト・ゴールドも用いられた。大衆用地金としてはプラチノンと呼ばれた白色金属が登場した。

大正前期の好景気はあくまでヨーロッパの戦争で得た漁夫の利であり、戦争が終息すれば景気にも陰りが見えてくるのも当然である。好景気時にさらなる利益をあてこんで工場などの設備拡大に走った人も多かったので、これも不景気になってしまった一因だといわれる。

大正九年からの恐慌の発端は大正九年3月に株式市場で株価が半分から三分の一に大暴落するところから始まった。株価暴落のため銀行取り付け（預金払戻請求）が続出。

経済は大混乱し産業は疲弊した。このことは貴金属宝石業界にも大きく影響した。事実、大正十年（１９２１）のダイヤ輸入は、前年の約５１４万８千円から一挙に約１６９万円と大幅に減少した（大正前期編**図１−２−39**）。この数字からも反動の大きさが分かると思う。

「宝飾品」という新語が用いられ、「宝飾店」も出現

不景気な時代にあったが貴金属宝石店の店頭からダイヤの装身具が消えることはなく大正十一年（１９２２）後半頃になるとダイヤの指輪やペンダントの広告も目につくようになる。

それどころか、現代でも使われている「宝飾品」という言葉もこの頃から頻繁に使われるようになった。

「宝飾品」という新語は、従来の「貴金属装身具」に代わる語として、英語のJewelryをヒントに「宝石を使用し、または宝石を主とした貴金属製の装身具」という意味で使われた（『宝石百年』（第二部）①）。

宝飾品という用語の普及に伴い、有力店の中には、大正初期の尚美堂宝飾店（大正前期編**図１−１−１**）に続き、新たに店名に「宝飾店」とつける店も出てきた（**図２−１−１**）。

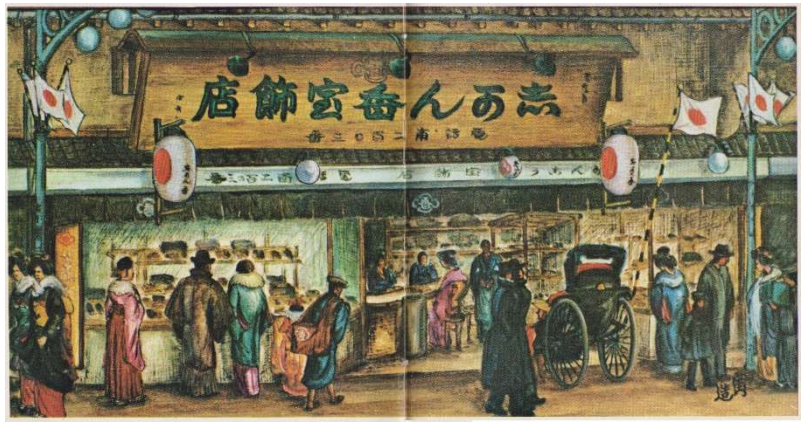


図 2-1-1

大正 10 年頃の大阪の老舗・芝翫香宝飾店（絵）

『芝翫香 躍進の百年』②より

また、業界紙の中にも「宝飾」という用語を用いるところも出てきて、大正五年（１９１６）創刊の『時計と貴金属』は、大正十一年（１９２２）には『日本宝飾時報』に改題している（『日本装身宝飾史』③）。

プラチナが更に普及

不況の時代とは一見矛盾するようだが、この時代にはプラチナ―当時は金を大きく凌ぐ高級貴金属―に魅せられる人が増えた。

プラチナは明治後期から宝飾品に用いられ、大正前期に普及し始めたが、高級品には金が多く、プラチナはまだ一部の人たちだけが用いた。だが大正も後期になると指輪などに用いる人が増えた（コラム２-１）。

（コラム２-１）

愛の象徴としてのプラチナ指輪

高価ではあるが、白く清楚な印象を与えるプラチナは、愛を象徴する指輪として好ましい素材だったようでこの時代にはプラチナ指輪をめぐるいくつかエピソードが残っている。

ここでは、夢見るような独特の美人画で一世を風靡した竹久夢二の愛の指輪を紹介する。

さまざまなラブロマンスが伝えられる夢二だが、指には死ぬまで甲丸のプラチナの指輪が光っていた。その内側には「ゆめ３５　しの２５」と横書きに小さく刻まれていたという。「ゆめ」とは夢二、「しの」とは愛した彦乃のことで「２５」は彦乃が死んだ年令。彦乃の死去したのは大正九年（１９２０）１月16日であるから、この指輪が作られたのは、その少し後だろう。

夢二にとって彦乃は最愛の人であり永遠の人。夢二は彦乃のことは一生忘れまいと最後までこの指輪を離さず身に着けていた（『竹久夢二のおしゃれ読本』④他）。

竹久夢二

『画報　日本近代の歴史８』⑤より

左手中指に指輪が見える。

2-2 業界と宝飾装身具の推移

真珠養殖の技術革新―真珠王国日本へ基礎固まる

大正五年（１９１６）、真珠養殖は「地飼い式」（地蒔式）から「垂下式」に移行。このことが真珠業の発展に大きく寄与した。

さらに、後期の大正十一年（１９２２）には猪木若蔵、猪木秀三などにより「卵抜き法」というきれいな大粒真珠の形成法を開発された（『御木本幸吉』⑥）。

「垂下式」とは、これまでは海底に施術した真珠貝を飼う「地飼い式」養殖であったものを、丸太を組んで筏を作り、その下に籠を

吊るし、籠の中で貝を飼う方法。

養殖籠を筏に垂下することにより外敵から養殖貝を守り、赤潮（プランクトンの異常繁殖）の時には養殖籠を移動することもできるなど地飼い式に比べ利点の多い養殖法である（『真珠とダイアモンド』⑦他）。この養殖法の発見により真珠養殖は各地に広がった。

「卵抜き法」とは挿核前に貝の活力をコントロールし、良質の大粒真珠を作る方法。

真珠の核を生殖巣（せいしょくそう）に入れるとシミ珠になることが多い。そこで養殖籠にアコヤ貝を詰め込み、劣悪な環境に置くことで貝を弱らせ精子や卵子を排出させる。弱った貝は大きな核を吐き出す力がなくなりシミのない大粒真珠が作れる（『真珠の世界史』⑧他）。

また、大正十年（１９２１）頃には藤堂安家が真珠のシミや汚れ取りの方法を開発している。サンゴのシミ抜きに過酸化水素水（商品名・オキシフル）を使うことを真珠に応用したもので、これによりきれいな真珠を得ることが可能になった（『真珠の世界史』）。

こうした養殖法の技術革新や真珠改良法の発見により、大正後期には真珠王国日本への基礎が固まっていった。

御木本装身具店

こうした時代の中で大正十年（１９２１）４月、御木本真珠店は本店隣りに、御木本装身具店という現代でいえば高級アクセサリーの店を開店。時代を先取りしての開店である。店長には御木本幸吉の長男である御木本隆三が就任。

ミキモトの社史によれば、装身具店は「真珠を用いた装身具需要の広がりを反映した新規開店」であり、「その背景には半円真珠に加えて真円真珠の登場で、装身具の充実、多様化といった変化がみられた」ためである（『御木本真珠発明一〇〇年史』⑨）。ここでは指輪、帯留、短鎖の他、ネックレス、ブローチ、ヘアピン（束髪用簪）、ネクタイ・ピン、手釦（てぼたん）（カフスボタン）、懐中時計鎖などアクセサリー感覚の洋風装身具を主に販売した（**図２−２−１**）。

地金素材は銀が多かったようだが15金やプラチナの製品もあった（**図２−２−２**）。

装身具店の製品には本店である真珠店の製品と区別して「貝Ｍ」ではなく「四角にＭ」の刻印が打たれた（**２−２−３**）。当時としてはモダンな店だったが、この店は惜しくも関東大震災で焼失。

（追加コラム）

御木本隆三

本来ならば御木本幸吉の後継者となるはずだった御木本隆三（１８９３～１９７１）はエリートである。東京帝国大学（現在の東京大学）に入学するも、大正三年（１９１４）、経済学者の河上肇をしたって京都帝国大学（現在の京都大学）に進み、イギリスの思想家・美術評論家のジョン・ラスキンを研究、傾倒する。大正九年（１９２０）に単身渡英し、オ

図 2-2-3
御木本装身具店のMマーク
帯紐の留め金具部分の K15、P（プラチナ）の下にMとある。

図 2-2-2
御木本装身具店のプラチナ、K15 帯留
プラチナ、K15、オニックス、真珠、ダイヤ

図 2-2-1
御木本装身具店広告
大正 12 年 5 月『婦人画報』より
装身具店の各種洋風装身具販売広告。

ックスフォード大学ラスキンカレッジで学び、ラスキンの書籍や絵画などの資料を収集。

大正十年（１９２１）、御木本装身具店開店にあたり店長となる。この店は隆三のセンスや好みが商品に取り入れられたハイセンスの店だった。しかし店は大正十二年（１９２３）の関東大震災により焼失。大正十三年（１９２４）には御木本真珠店のロンドン支店長に就任。

大正十五年（１９２６）にはこれまで収集したラスキン資料の展覧会を日本橋・丸善で開催。ますますラスキンに打ち込み昭和六年（１９３１）に「東京ラスキン協会」を設立。

昭和九年（１９３４）には御木本幸吉の後を継いで日本養殖真珠水産組合長になるが、ラスキンにのめり込み、銀座に「ラスキン文庫」というラスキンの遺品や絵や書籍を展示した高級喫茶や、その他のラスキン関係施設を開く。

だが利益を度外視した経営のため、昭和十二年（１９３７）７月、隆三はついに破産に追い込まれた。そのため御木本幸吉はやむを得ず準禁治産者の宣告を申請。

ラスキン文庫は隆三没後の昭和五十九年（１９８４）、隆三の長男・美隆と長女・幸子が中心となり再興され、文化遺産として残された（『御木本真珠発明一〇〇年史』『御木本幸吉の思い出』）。

このように、御木本隆三の生涯は実に波乱に富んだものであり、ラスキンに捧げた一生といってもいいだろう。

御木本隆三（71 才）

『御木本真珠発明 100 年史』より

真珠のネックレス初登場

図２−２−１の御木本装身具店の広告には真珠のネックレスをした洋装の女性が描かれているが、一カ月前の同年４月に発行された御

木本真珠店発行の『真珠』40号には装身具店より一足早く真珠のネックレスが紹介されている（**図2-2-4**）。

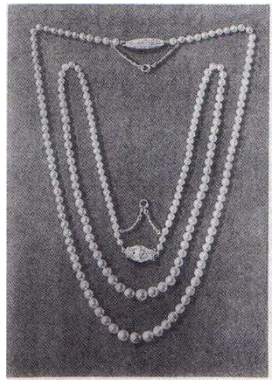


図2-2-4
初めて『真珠』40号に紹介された真珠ネックレス
『御木本真珠発明100年史』より

おそらく真珠のネックレスは真珠店と装身具店が同時期に発売したのだろうが、これは時代に先駆けた発売である。

真珠に限らず、ネックレスが一般に登場するのは、日本では大正十二年9月の関東大震災以降に洋装が普及し始めてからのことである。

なお、この時代から昭和初期までの真珠のネックレスはすべてグラデーションタイプで、同じ大きさの玉を連ねるユニフォームタイプが用いられるのは戦後の昭和三十年代中頃からのこと。

ホープルビー、ホープサファイア（合成石）

大正後期になっても合成石（当時は宝石扱いで合成宝石と呼ばれた）は相変わらずの人気で、指輪などの洋風装身具や帯留などの和装の装身具に広く用いられていた。

そこに注目し、大正十一年に、宝石輸入商の久米武夫商店は、「ホープ」と名付けたアメリカ製の合成ルビーやサファイアなどを一手に輸入し発売した（**図2-2-5**）。この合成石はフランスとドイツの工場で研磨したもので、その品質は均一優秀で、研磨も入念だった（『宝石百年』（第二部））。

図 2-2-5
久米武夫商店のホープルビー、ホープサファイア広告
大正 10 年 10 月『金属大鑑』より
『日本の「宝飾装身具」広告史』⑩

久米が特に力を入れたのは、合成石による誕生石指輪の一層の普及である。

普及宣伝のためのパンフレット『寶石小話』（**図 2-2-6**）ではその優秀性を、「指環その他の宝飾品に細工嵌入、日常使用して永久に摩損（まそん）せない特徴は、益々一般各位の御高評を博し、最高優秀品として御定評を賜はっている所であります」とアピールしている。

次に述べるように合成石の輸入・普及に貢献した日本人は何人かいるが、その中でも久米武夫の名は逸することができない（コラム 2-2）。

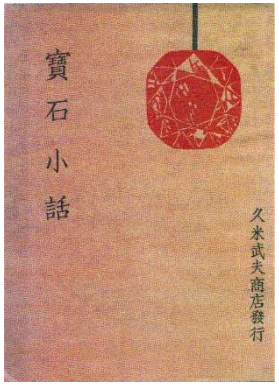


図 2-2-6
『寶石小話』表紙
19 ページのコンパクトな小冊子。発行は昭和 3〜4 年頃か。

（コラム 2-2）
日本最初の宝石研究者、久米武夫

御木本（真珠店と貴金属工場）は人材の坩堝（るつぼ）であり、さまざまな人がいるが時折御木本の枠にはまりきれない人を輩出する。一人は大正前期編で紹介した小林豊造であり、もう一人が久米武夫である。

久米武夫は実業では合成石の輸入と普及で名を残したが、それ以上の仕事を宝石研究の分野で成した。久米武夫については乙竹宏『真珠とダイアモンド』に収められている「宝石学の先駆者 久米武夫」が詳しい。

それによると、久米武夫（１８８７～１９５８）は、御木本幸吉の妻・うめの弟で明治三十三年（１９００）に御木本真珠店に入社。入社間もない明治三十七年（１９０４）、斉藤信吉と共にセントルイス万国博（アメリカ）に出品をかねて市場調査で出張。

明治四十三年（１９１０）にはロンドンの日英博覧会に出張。この時ベルギーに立ち寄りダイヤモンド市場を見たことが宝石に対する研究熱を高めるきっかけとなった。

大正元年（１９１２）にはニューヨーク勤務となり、宝石関連図書や新聞雑誌の宝石記事を精力的に収集し、関心領域は真珠に留まらず、広く宝石全般に及んだ。この期間中にアメリカ最初の宝石学講座がコロンビア大学鉱物学教室で開設され、それに参加できたことを「予の寶石研究上の一大幸福なりき」と自著（『ダイヤモンドと眞珠』⑪）に記している。大正九年（１９２０）には御木本真珠店を退社し、宝石（主として合成石）の輸入と宝石学研究に邁進した。

これまでの研究成果をもとに大正十年（１９２１）に書いたのが『ダイヤモンドと眞珠』。この本はその後の昭和二年以降からの『通俗寶石學』（昭和二年）、『寶石辭典』（昭和十一年）、『寶石學』（昭和二十八年）へと続く久米宝石学のベースとなった重要な著作である。

現代では宝石学という研究ジャンルは多くの人々に知られるところだが、その基礎を作ったのが久米武夫であり、久米の書いた宝石学図書とそれにかけた情熱は今でも色褪せることがない。

合成石輸入、普及の貢献者たち

久米武夫（久米武夫商店）以外にも合成石の輸入・普及に貢献した人たちがいた。『宝石百年』(第二部)では「逸することはできない」人物として何名か挙げているので紹介する。この人たちによって多量の各種合成石が国内で流通した。

シャルホープ、ヌーレ・タクラ、松林忠三（丑三）―

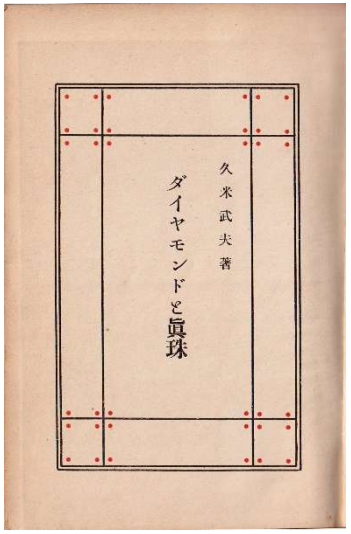
シャルホープはダイヤモンドの輸入業者。この人によって輸入された合成石はヌーレ・タクラ（『日本の「宝飾装身具」広告史』6-64）が一手に引き受け、松林忠三（『日本の「宝飾装身具」広告史』5-98）が販売。その後ヌーレ・タクラは真珠を輸出して、その輸出額の一部で合成石を輸入、これを松林が販売。

石橋兎市―

横浜のメシュラム商会の宝石担当者。外国人業者の輸入したドイツ製合成石を国内業者に販売。

谷口万吉―

第一次世界大戦中に合成石研磨に着手した最初の日本人。『宝石をつくる』⑫によると谷口は鹿児島県万世町（現在の加世田市）の人。単身スイスに渡り宝石研磨工場に就職し研磨技術を習得して帰国。その後、自邸内に宝石研磨工場を設け、スイスから輸入した合成石の原石をカット研磨し、国内の業者に販売し隆盛を極めた。谷口宝石研磨工場は優秀な技術を持っていたので、戦時中は技術保存工場の指定を受け仕事を続けることができたといわれる。



『ダイヤモンドと眞珠』扉

〔参考文献〕

1 『宝石百年』
中村善吉　若葉倶楽部　１９６６年

2 『芝翫香　躍進の百年』
芝翫香編　芝翫香　１９７０年

3 『日本装身宝飾史』
日本宝飾時報社編　日本宝飾時報社
１９３０年

4 『竹下夢二のおしゃれ読本』
石川桂子、谷口朋子編　河出書房新社
２００５年

5 『画報　日本近代の歴史８』
日本近代史研究会編　三省堂　１９８０年

6 『御木本幸吉』
大林日出雄　吉川弘文館　１９７１年

7 『真珠とダイアモンド』
乙竹　宏　同友館　１９７４年

8 『真珠の世界史』
山田篤美　中央公論新社（中公新書）
２０１３年

9 『御木本真珠発明一〇〇年史』
御木本真珠発明１００年史合同編纂委員会
ミキモト　１９９４年

10 『日本の「宝飾装身具」広告史』
露木　宏　東京美術　２０２３年

11 『ダイヤモンドと真珠』

久米武夫　大倉書店　１９２１年

12『宝石をつくる』
広瀬三夫　全国出版　１９８０年

付加コラム参考文献

『御木本幸吉の思い出』
御木本美隆　御木本真珠島資料編纂室
１９７９年